

金浜の地で野菜を作る意義

被災地で復興のための畑作りはよく聞きますが、多くの場合、大量の土を投入するとか、山間の休耕地の利用がほとんどです。金浜のように瓦礫の一時集積所となり、かつ災害危険区域(※1)での畑作りはあまり例がありません。

大量の海水・瓦礫に洗われた畑(土壌)での作物の生育状況は?

端的な答えは「思わしくない」です。

でも、雑草を見ればすごく元気がいい。海水に含まれるミネラル分が土壌を潤していると考えられるのです。しかし、市販されている野菜の種は、無菌室での純粋培養に近い状態で作られたり、品種改良などの繰り返して病気などに対する耐性が、自然界の雑草と比べて損なわれていることは否めません。そうした条件下での栽培は今後の復興を考えるためにも意義深いものがあるのです。

※1 災害危険区域

防潮堤や道路などを整備した後に、今回の3.11と同じ津波が同じ潮位で来襲した時に、1m以上の浸水が予想される区域及び隣接区域について災害危険区域の指定を行い、**住宅等の建築を制限**します。

ちなみに、『結の郷』のユニットハウスはただ置いてある箱、つまり基礎工事を伴わず、非居住の構造物のため、この摘要から除外されるのです。

昨年の収穫物・・・大根



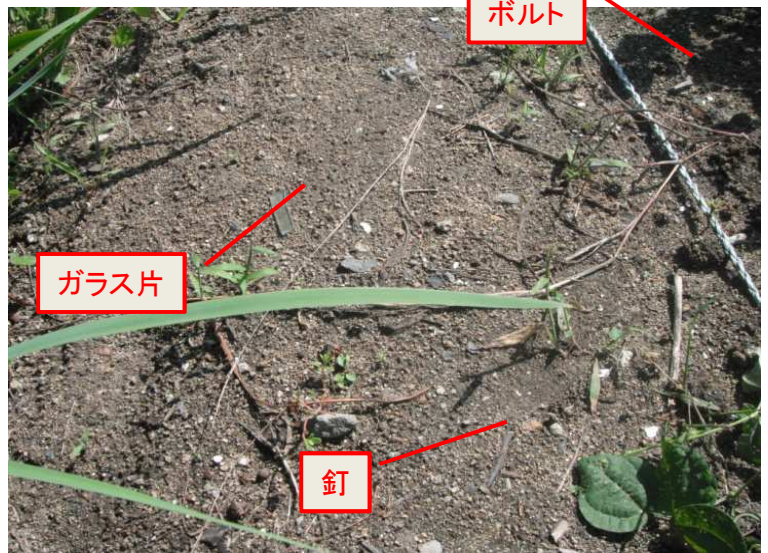
この2枚の写真は、土の中に埋まっているガラス・釘などの異物で、成長期の大根が傷付き、ひび割れや、ばい菌などで病気になった大根です。一生懸命育てた野菜ですが、これでは食べることもできません。

だからこそ、本当に時間をかけていぬいに異物を取り除かなければならないのです。その点でチーム「かわいキャンプ」は本当に頼りになります。さまざまな制約に縛られて、上辺だけキレイになればオッケーという作業が多かったのですが、じっくりと取り組みたいものです。

小さなことからコツコツと～。



畑の現状(やらせ無し)



別荘脇の花壇の完成



花壇もようやく完成し一安心です。通りかかる人からは「楽しみだね」と声を掛けられていて、ちょっと焦る気持ちもありましたが、なんとか形にすることができました。

花壇の枠は、田老地区の杉の間伐材を使用し、肥料はカキ殻を粉砕したものに、杉間伐材の皮を燃やしてできた灰を混ぜて使用しています。これに「くずわかめ」を混ぜ込んで、天然のミネラルたっぷりの肥料を花や野菜に与え、元気になるように育てていきます。



入口付近は半円形にして、厳しい冬を乗り越えた水仙の球根を移植してみました。こちらも津波被害を生き残った球根です。

花壇脇の斜面に芝桜を配置してみました。これは土の斜面を保護する目的と、花壇周りを飾るために植えています。

芝桜は繁殖力が旺盛なので、彩の少ない大地を緑で覆って華やかな雰囲気を演出したいと思えます。

